

大型火縄銃と馬上筒

大筒

大友宗麟（1530-1587）は、日本に大口徑の火器を導入した人物として知られている。1576年、大友は敵対勢力に対抗するためポルトガルの支援を求め、入手した重火器は「大筒」として知られるようになった。この大筒に関する知識が広まり、16世紀末には国内の鉄砲鍛冶が大筒を製作するようになった。

直径 26 ミリの球を発射する大筒は、射程距離が 500 メートル前後で、城郭などの攻撃に使われた。徳川幕府が平和な時代を迎える前の最後の大規模な戦いの一つである大坂の陣（1614 年～1615 年）でも重要な役割を担った。大坂城は 30 ミリの大筒で 24 時間砲撃され、守備隊の士気が下がり、降伏に追い込まれたといわれる。

日本の鉄砲鍛冶は 1600 年代から 1700 年代にかけて、この大筒の基本設計を改良し、ついには口径 100 ミリにも及ぶ大砲を作り出した。ヨーロッパでは、ナポレオン戦争（1803～1815 年）で、同じような口径の野戦砲が盛んに使われた。

抱え大筒

持ったまま撃てる大筒は「抱え大筒」と呼ばれた。重量があり、反動も大きいため、狙いを定めて撃つことが難しく、重量のあるこの大筒を扱うことは容易でなかった。西洋の火縄銃にはショルダーストックがあるが、日本の火縄銃にはない。そのため、射撃手たちは強力な鉄砲を支え無しで発射する独自の方法を開発した。立ったままもしくは膝をついて発射し、左肘を立てた左膝の上に乗せて支えるという方法であった。発射の際は、右腕を後ろに振って反動を上方に逃がした。

武将たちは、携帯性と威力を兼ね備えた「大筒」を好んだ。狭い道や曲がりくねった山道など、車載用の大砲では通れないような場所でも持ち運ぶことができた。

馬上筒

日本の鉄砲鍛冶は、騎馬武者用の短銃身鉄砲を開発した。この銃は、遠距離での命中精度の低さを克服し、扱いやすさを実現した。

加藤清正